

昭和

16

大岡昇平

埴谷雄高

野間宏

大江健三郎

文学全集

小学館

昭和文学全集



16

大岡昇平

埴谷雄高

野間宏

大江健三郎

昭和文学全集

第16巻

昭和六三年十一月一日 初版第一刷発行

著者——上林暁、和田芳恵、野口富士男、川崎長太郎

八木義徳、木山捷平、檀一雄、外村繁

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一東京都千代田区一ツ橋二丁目二番一號

振替 東京八二〇〇番

電話 編集・〇三―三三〇―五二二六

業務・〇三―三三〇―五三三三

販売・〇三―三三〇―五七三九

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568014-8

©IKUO TOKUHIRO SHIZUKO WADA

FUJIO NOGUCHI CHIYOKO KAWASAKI YOSHINORI YAGI

MISAO KIYAMA YOSOKO DAN AKIRA TONOMURA 1988

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

大岡昇平 5

俘虜記 より

7 捉まるまで

28 八月十日

38 演芸大会

52 武蔵野夫人

141 野火

209 花影

269 叔母

283 母六夜

288 焚火

『朝の歌』より

297 富永の死、その前後

309 友情

埴谷雄高 317

319 夢魔の世界（「死霊」第五章）

381 虚空

397 意識

410 ドストエフスキイの方法

414 ドストエフスキイに於ける生の意味

419 ドストエフスキイの位置

427 永久革命者の悲哀

443 指導者の死滅

453 憎悪の哲学

461 敵と味方

4 7 3 夢について——或いは、可能性の作家

4 8 0 可能性の作家——続・夢について

4 8 9 不可能性の作家——夢と想像力

4 9 7 闇のなかの黒い馬

5 0 1 宇宙の鏡

5 0 5 夢のかたち

5 0 9 神の白い顔

5 1 4 不合理ゆえに吾信ず

野間宏 5 2 5

5 2 7 暗い絵

5 6 8 顔の中の赤い月

5 8 4 真空地帯

大江健三郎 8 0 5

8 0 7 死者の奢り

8 2 5 他人の足

8 3 4 飼育

8 5 9 人間の羊

8 7 0 不意の啞

8 7 8 頭のいい「雨の木」
レイン・ツリ

8 8 9 新しい人よ眼ざめよ

1 0 1 9 われらの性の世界

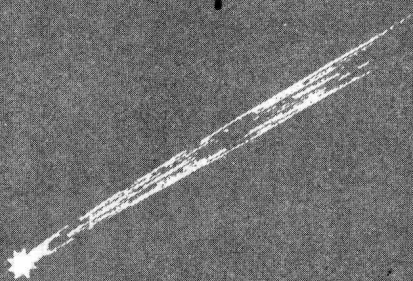
1 0 2 5 死者たち・最終のヴィジョンと

われら生き延びつづける者

1049	作家アルバム
解説	
1057	大岡昇平……青木健
1064	埴谷雄高……立石伯
1071	野間宏……紅野謙介
1078	大江健三郎……渡辺広士

年譜	
1085	大岡昇平……池内輝雄
1091	埴谷雄高……立石伯
1097	野間宏……紅野謙介
1102	大江健三郎……篠原茂
1108	底本について
1109	用字用語について

大岡昇平



俘虜記 より

或る監禁状態を別の監禁状態で表わしてもいいはずだ デフォー

捉まるまで

わがころのよくてころさぬにはあらず

たんにしやう
歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜^{かりよ}となった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四国の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二ヶ中隊、海岸線に沿った六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行うのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島

の南部及西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一ヶ小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊はそれぞれ東南ブララカオ及び西北パルアンにあった。サンホセ、パルアン間、つまりこの島の全長を蔽^{おほ}う約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼等は攻撃しては来なかった。

昭和十九年十二月十五日米軍は艦船約六十隻をもってサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帯を横切って、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はまだこの地に上っていないが、彼等はサンホセの砲声を聞いて、いち早く糧食、無線機と共にここに退避していたのである。糧食はなお豊富であり、まもなく我々と合流した附近の水上機基地の海軍

部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なお三ヶ月以上を支え得る筈^{はず}であった。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散する迄、我々は約四十日ここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては来なかった。「奴等は怠け者だからこんなとこまでやって来やしないさ。そっちが来なけりゃこちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだろう」と我々の当分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいったが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にじっとして居れば、戦は我々の上を通過して、ここは最後まで所謂「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々の様な孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかった。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵偵察の命を受け、度々十数名より成る斥候が組織され、十日或いは一週間サンホセ附近の山中に潜伏して帰った。或る時彼等は米哨兵^{ベントウヘイ}に発見され射撃された。

まもなく一ヶ小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見たる状況を大隊本部に打電した。彼等は屢々数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操って魚を釣った湾内には、米機外艇が引揚げた様に白い水脈を引いて縦横に疾駆していた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸して居り、彼等に乗せた舟艇は以来行方不明であった。もっともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもって上陸した米軍に対する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持っていなかった。

しかし我々はその後も命令により幾度かブラカオに出張し、或いは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行った。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに来た不運な住民を拉致して帰った。こうして我々は本意ながらだんだん掃蕩される原因を作った。

行ったのである。

こうした絶望的状况にあつても、我々兵士は比較的呑気であつた。我々は全くその年初めて召集され、三ヶ月の教育の後直ちにここへ送られた補充兵であり、経験の欠如から事態の重大さがピンと来なかったからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を毎日氣に病んでいられるものでもない以上、こうした無智は我々にとつてむしろ一種天与の恩恵だつたということも出来ようか。我々は大部分私の様な三十を越した中年の兵士であり、目前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかった。

それにこの山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。氣候は既に乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみのままの露営生活には丁度手頃な陽気である。糧食も差当って不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのずから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも来た様な氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる付近の山人（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い異人種で、戦争に無関心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を与えて芋、バナナ、煙草等

を獲た。我々は時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。しかし災厄は意外な方からやつて来た。マリヤである。

ミンドロは比島群島中最も悪性のママリヤの発生する島だそうである。しかし予防薬をとつていたため、サンホセに在る間は患者は二、三名を越えなかったが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したため、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立つて戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月の間には大体一日三人ずつ死んで行った。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その呑気な日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充滿している病人を眺め、黙つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いていた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしているから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局こうして病人が増えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を不落の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかかる樂觀的予測を抱懷し得た筈はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をなし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れていた。私は彼の体にその僚友の死臭を嗅ぐ様にさえ思つた。

「警備隊は警備地区をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した住民には、慣習に反して食糧を与え放ち帰らしめた。彼の言動には常に一種の諦めがあり、彼の動作はいわば過度に緩慢であつて、時々齒の間から押し出す様に弱く笑つた。犠牲者の笑である。

彼は幾分進んで死を求めた様である。サンホセ駐屯中に行った討伐戦において、彼は常に先頭に立つて戦い、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戦争の要請を至上命令と

して自らに課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはいられない、あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等是一般にただ自己の死によつてしか、その部下に対する要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて真先に戦死した。恐らく本望だらう。

一種の共感から私はこの若い將校を秘かに愛していた。私もまた私なりに彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自己の確実な死を見詰めて生きていたからである。私は既に日本の勝利を信じていなかった。

私は祖国をこんな絶望的な戦に引ずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、今更彼等によつて与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置く、こうした考え方には私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤わないためにも、そう考える必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具の様な連絡船の赤や青の灯を見て、奴隷の様に死に向つ

て積み出されて行く自分の惨めさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という觀念に安住し、時局便乗の虚言者も空しく談ずる敗戦主義者も一瞥げに嗤つていたが、いざ輸送船に乗つてしまつと、単なる「死」がどっかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人はいり、別れは實際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にいるという事実によつて、確実に過ぎ去つた。未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虚無であり、そこに移るのも、今私が否応なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思い患うことがあろう。私は繰り返しこう自分にいい聞かせた。しかし死の觀念は絶えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、ただ確実な死を控えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を眼で

貪^{なま}った。私は死の前にこうした生の氾濫^{はんらん}を見せにくれた運命に感謝した。山へ入ってからの自然には椰子^{やし}はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取って替ったが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確実なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な変化が私の中で起った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確実な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する気になった。少なくともそのために万全をつくさないとはいふ意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなつて来た死の影に対する私の肉体の反作用であつた。こうした異常な状態にあつて、肉体が我々をして行わしめるものは頗る現実的であるが、その考えさすものは常に荒唐無稽^{かうとうむき}である。

私には一人の仲間があつた。それはSという或る漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だったが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持

つ父親に知らさず、自ら内地に残る手段を絶ち切つていた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦つてしていると判断し、「こんな戦場で死んじやつまらない」と思つたという。

この言葉は私にとって一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲^{きようごう}が、一種の自己欺瞞^{きごう}にすぎないことに私は突然思い当つた。こんな辺鄙^{へんび}な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、単に「つまらない」、ただそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いづれ我々が米軍によつて現在地を逐^おわれるのは確実として、何とか敵中を潜^{ひそ}つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島伝いにボルネオに遁^{のが}れる（この際私が海水浴場で覚えた帆船術が役立つ筈^{はず}であつた）。私はボルネオも安全とはいえないから、いっそ南支那海を突切つて仏印^{ぶつしん}に渡つてはどうかと提案したが、Sはそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかった場合、我々は再び山に籠^{こも}り、草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は子供の時読んだ「ロビンソン・ク

ルーソー」の細目を語り合い、山人から竹から火を起す方法を学んでおいた。

この計画はいかにも空想的なものであるが、我々はその実現の可能性を少しも疑わなかつた。

我々は繰り返しこの計画を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足^{むどけにんそく}の様に快活^{くわく}だつた。（我々は實際墓穴を掘つた）我々はまた当時我々の最も身近な敵、マラリヤに罹^{かか}つた場合を考慮し、現在残つた唯一の対抗法、つまり予め体力を貯^{たくわ}えることに全力をあげた。我々は病人の残した粥^{かゆ}を食べ、土に落ちた飯粒も拾つて食べた。

しかし我々はこうしてあらゆる場合に備えて周到に計画していたにも拘^かわらず、我々がマラリヤで発熱している丁度その時、米軍がやつて来る可能性については想到していなかつた。

二人共申し合わせた様に一月十六日に発熱した。私は四十度の熱が続き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。Sの症状は私ほど重くはなかつたが、やはり毎日三十九度以上の熱が出た。

最初の試練が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の体は強健ではなかつたが、病に対しては比較的抵抗力があるのを知つていた。私は細心に自分の症状を観察

し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがその時の私の考えであった）一切食べないことにした。半月位食べずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯えてあると私は自負していた。

衛生兵は山へ入ってから奇妙なマラリヤ療法を発明していた。それはマラリヤ患者は水を呑んではいけないというのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲し、断乎として反対した。あらゆる論拠をあげて、その禁止の無意味なることを証明して見せた。分隊長は怒って兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、或いは自分で十間ばかり離れた泉まで匍（は）って行って水筒に水を入れた。

私は死がマラリヤ患者を急激に襲うのに気がついていて、私は絶えず自分の体の状態を監視し、まだ死につつないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便（ふんべん）を失禁するのを見て、苦痛が激しくなると、わざと戸口まで匍（は）い出して小便をして見た。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱して、少しよくなったと思われた一人の兵士が、

死人の装具を一丁ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。帰って小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪（ゆが）んでいるのを認めた。翌朝彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方発病後初めて少量の粥を摂った。その時展望哨が米船三隻がブララカオ湾内に入るのを見たと言えられた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかった。帰っても不機嫌に横になったきり何もいわなかった。我々は通りすがりの兵士から直ちに四名の斥候が出たということを聞いた。

翌朝眼がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなっているのを、不思議な気持ちで眺めたのを憶えている。私は漠然とその払曉米軍が来るかと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかった。夜私は分隊長に「今日米軍が来なかったところを見ると、僕達は包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人の癖に生意気いうな」といった。

次の日は一月二十四日である。この払曉また一組の将校斥候が出た。七時頃一人の兵士が帰って、一行は麓で襲撃され、将校は戦死したと伝えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は仕度しろ、といった。そして彼自身も仕度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。

私も漸く歩いて便所へ行けるまで恢復していたが、分哨まで十五キロの道は自信がなかった。その先まだどれだけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がここで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残った。Sは行くつもりらしく仕度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の廻りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行こう」といった。私はふと歩けるところまで彼と一緒に行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼は黙っていた。

各自押し黙って仕度をした。別れの言葉は交されなかった。

出発の時になった。私が皆に随いて歩き出すとすると、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ない様にしながら「大岡、残る

か」といった。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏いになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答え、銃を下した。

Sは何故かこの時先発して私の見えないところまで上っていた。その時の状況では彼を呼び返す気は起らなかった。こうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいわずに別れてしまったのである。

この退避組は全部で六十名余りになったが、二キロばかり行ったところで襲撃されちりぢりになった。米軍はこの時既に完全に我々を包囲していたのである。Sはその晩まで分隊長と一緒にいたが、翌朝落伍していたそうである。(こうしたことを私は後で私と同じ俘虜収容所に来たこの分隊長から聞いたのである。彼は四名の兵士と共に一ヶ月ばかり山の中をさまよった揚句比島人に捕えられた。彼はその手に残っていた手榴弾を投げなかった)

残った者の取るべき行動については、何の命令も与えられていなかった。兎に角各自靴を穿き、脚絆を巻いて戦闘準備をして横になつた。

私はこの時分隊で一番重い病人であつたから残るのは当然として、他の三人が出発した連中と比べて、特に悪い状態にあるとは見え

なかったのは意外であつた。

一人はKという有名な大正の講壇批評家の息子で会社員であつた。彼は常々命令された最小限度を行うという頗る消極的な勤務振りを示し、上官の受けはよくなかつた。Kというのは珍らしい姓であつたから、私は或る時彼に「君はK先生の親類かい」ときいたが、彼は「親類じゃねえ」と囁んで吐き出す様にいった。それは「親類じゃねえ、赤の他人だ」とは受け取れない妙な返事だつた。私は「息子だな」と感じたが、その返事が気に入らなかつたから追求しなかつた。しかしサンホセに米軍が上陸する直前私が最初の発熱をした時、彼も足を傷めて班内にいたが、飯盒に水を汲んで来て丁寧に私の頭を冷やしてくれた。その看護には女の様な奇妙な優しさがあつた。彼の不断の人に馴れないエゴイスチックな態度とは似合わなかつた。私が前の質問を繰り返すと彼は素直に次男だといひ、問はず語りに彼の父が震災で不慮の死を遂げてから後の一家の歴史を細々と語つた。以来我々は友人となつた。しかし彼は私とSの脱出計画を冷笑していた。

彼ははっきりしたマラリヤの症状を示さず、仮病じゃないかという者もあつた。少なくとも出掛けたSよりは遙かにいい状態にあつたことは事実である。彼は口を曲げて「行

つたつて残つたつて同じことさ」といった。彼は心は優しいが幾分自分を粗末にする男だつた様である。

他の一人は土木師だつた。彼はサンホセ駐屯中上官の前でよく働き、屢々上等兵の勤務をとつた。私は彼を阿諛者として嫌つていたが、山へ入り最早序列も昇進も問題でなくなつた後にも、彼は依然としてよく働き、進んで重い物など担いだ。そして恐らくそのため分隊で一番先に病人となつたのである。私はこの齡になつてもまだ人を見る眼に誤りがあるのを秘かに愧じた。彼はもう熱はなかつたが、多分体が見掛け以上に弱つていたのであろう。

もう一人はおとなしい北多摩の百姓である。彼は行くとも残るともはっきり意志表示をせず、ただ皆が出掛けた後で、見たら彼がそこにいたというにすぎない。彼はべそをかいた様な顔をして、脚絆も巻かず壁に向いて寝てしまつた。

時刻は残留者が誰も時計を持っていなかつたのははっきりしたことはわからない。私は通りがかりの兵士に飯盒に水を汲んで来て貰ひ、何度もそれを水筒に詰めようとして、つい億劫で止めたのを憶えている。物音はなかつた。兵士もだんだん通らなくなつた。

突然、我々の小屋のあつた谷の下の方から

三発の鈍い発射音が聞え、少し間をおいて中隊本部の山の上で三発の澄んだはじける様な音がした。

それは小銃の音ではなかった。私はそれまで迫撃砲の音を聞いたことはなかったが、何故かこの時それを迫撃砲ときめてしまった。しかもそれは弾着を見るための試射の音である様に思われた。

皆起き上った。表情のない顔だった。「来たらしい——兎に角上まで行つて見ようか」と私はいった。皆「うん」と答えて身動き始めた。

私は飯盒の水を水筒に移そうとした。手が震えて水は外へこぼれた。私は「死ぬのに水は要らねえや」と呟いて飯盒を遠く投げ飛ばした。

私の友人は屢々私が何事にも見切りがよすぎるといつて私を非難したが、私が今日生きて帰つてこんな文章を書いていられるのは、ひたすらこの時この水を棄てたという一事に懸っている。

私はなるべく身軽に身をこしらえ弾入も一個しかつけないで外へ出た。その時の私の感じでは、私の生命はその三十発を射ち尽すまでは持たないのである。

他の三人はまだ中でこそそそやっていた。私は中隊本部まで一町の坂道も上れるかどうか

か自信がなかった。私は「先へ行くぜ」と声をかけて歩き出した。

「一緒に行かないのか」とKが不服そうにいった。私は「歩けるかどうかわかんないから、先に行くよ。多分途中で待ってる」といい棄て、銃を杖に狭いジグザクの坂道を上り始めた。これがこの連中の見収めとなった。

なお身ごしらえに手間どっていた彼等は、一人もこの米軍の砲撃正面となった谷から出られなかった。

私は不思議に歩いて途中休みなしに上り切ることが出来た。上ではみんな活潑に動いていた。二、三人ずつ隊伍を組み緊張した顔を連ねて無言で右左に摺れ違っていた。私は稜線を越えたところにある一つの分隊小屋に入つて腰を下した。二、三人の病兵が銃を抱き顔を歪めて横たわっていた。

途端に小屋は炸裂音に包まれた。私は反射的に小屋を出て弾の来る方角へ伏せた。今私が上つて来た谷の方角である。炸裂音は続いた。「前へ出ろ、前へ出ろ」という声が聞えた（この時私のいた位置から十メートル後方の衛兵所に弾が落ちて一人の兵士が大腿骨を砕かれたのである）。私は匍つて前へにじり出た。炸裂音はなお前方で激しくしていた。私は前進を中止した。「前へ出ろ」の声は続いていた。

中隊長が出て来た。彼は鉄兜を背負いその上から上衣を羽織つて僂僂の様な恰好をしていた。彼は笑いながら「賑やかでいいじゃないか」といつて双眼鏡を持ち添え、弾の来る方へ映画の画面を横切る人の様に歩いて消えた。これが私が見た最後である。

二十人ばかりの兵がそこらに伏せていた。私は隣りの兵士と顔を見合せた。その顔は熱病患者らしく蒼くふくれていた。その顔も笑っていた。

弾はまた一しきり激しくなつて依然前方に落ちた。それから止んだ。

「隊長殿がやられた」という声がし、「衛生兵」と呼ぶ声が続いた。（この衛生兵も後で収容所で会つたが、彼は中隊長の屍体を見付けることが出来なかったという）

先任軍曹が来て、「病人は谷に降りろ」といった。私は今しがた休んだ小屋へ行つて病人を促がした。彼等は私が最初入つた時と同じ姿勢で寝ていた。そして聞えるのか聞えないのか身動きもしなかった。

我々は私が登つて来た谷とは反対側の谷へ一列になつて降り始めた。病人でない者も皆降りた。私の前には先任軍曹が歩いていった。

「隊長殿がやられた」という声がまた聞えた。私は私の前に何の反応を示さずに動いて行く軍曹の背中を不思議な生物を見る様な気持で

見続けた。私は「軍曹殿、隊長殿がやられた
そうですが」と注意したが、軍曹は振り向か
ず「そうか——ほんとうかなあ」といつて、
なおも歩度を緩めずに歩き続けた。

谷を下りた所に別の軍曹が腰掛けていた。
先任軍曹は傍へ行って「隊長殿がやられたっ
ていうんだが、ほんとうかなあ」といつた。

「ふーん、ほんとかなあ」鵜鴬返しに別の軍
曹が答えた。私は彼等の会話を聞くに堪えな
かった。私がそこを離れようとする「みな
なあそこへかたまつて命令を待つてろ」とい
つて、谷の向うの空地を指さした。

そこには既に三十人ばかりの兵士が集つて
いた。病兵が道傍に倒れていた。或る者はう
つ伏せに死んだ様になって倒れ、或る者は銃
を横に抱いて「く」の字形に寝ていた。右手
は弾倉に当てられ弾を押し込もうとして力を
失っていた。弾が地上に散らばっていた。私
はその弾を込めてやり、兵士の体を揺すぶっ
たが、彼は眼をあかなかつた。

空地に集った兵士の間に伍長が一人混つて
いた。「命令を待つて」という軍曹の言葉を伝
えると「けつ、命令なんか、待つていられる
か。俺がうまく逃がしてやるから、みんな来
い」といつて一方の道をとんどん上り出し
た。私は機械的について行つた。上りは辛か
つた。私がずっと後れて半丁ばかり上り、一

息ついていると、一行はどやどや引き返して
来た。伍長は血走つた眼をして「駄目だ。こ
っちも撃つてやがる。あっちから行こう。あ
っちも駄目だったら、銃座へ立籠つて最後の
一戦を交えるまでだ」といいながら摺り抜け
て行つた。見知らぬ海軍の兵士が私を見て
「しっかりしろ」といひ棄てて続いた。

私は、ぼんやり彼等の後を見送つていた。私
はここまで上るのに私の力を使い果してい
た。私は一緒に行こうか、ついで行けるだろ
うかと思案しながら、そこに腰を下してしま
つた。

一隊はずんずん降りて横へ切れ、林へ入っ
てしまった。それはこの谷を少し上つてから
別の尾根へ取り付き、先で今彼等が引き返し
て来た道と合する道である。私はその道を知
らなかつた。

また一隊の兵士が足早に空地を横切つて林
の中へ吸い込まれて行つた。私はその中によ
く私のところへ身上話をしに来た、或る若い
兵士の姿を見た様に思つた。彼もまたマラリ
ヤで寝ていた筈である。その兵士の姿が私に
またついて行く気を起させた。私は思い切っ
て立上り今来た道を下りて行つた。

空地には倒れた兵士の外誰もいなかった。
林の中には道はなかつた。前方では兵士等の
呼び交う声が響いていた。その声はとんどん

遠ざかり、やがて啞く様な音となって止ん
だ。その遠ざかる速度は私の到底ついて行け
ない速度である。

私はまた腰を下した。そして「わかつた
よ。もう沢山だ。わかつたよ」と呟いた。
（こうして一人になってから、私は始終声を
出して考えていた。恐らく自分の考えを自ら
確めるためだったろう）「わかつたよ」とは
「どうせ俺はここで死ぬことにきめたんじや
ないか。思つたより歩けたからここまでつい
て来たものの、どうせ皆と一緒にには行けな
いんだ。わかつたよ」という意味である。

私は櫛に似た大木の根元に身を横たえ、お
もむろに腰の手榴弾をはずして傍へ置いた。
今となっては、これが私の唯一の友であり、
希望であつた。その強烈な爆発力は私を苦痛
なくあの世へ送ってくれる筈である。

この時私がやがてこの道を来る米軍につい
て何も考えなかつたのは、かなり奇妙なこと
である。恐らく私は到頭自分の最後の時に来
たという考えに圧倒されていたのであろう。
或いは漠然と米軍が来るにはまだ間があると
思つていたのかも知れない。何故なら、さつ
き伍長がこの道の前方に聞いたという銃声
を、私自身は聞かなかつたからである。

何の感慨もなかつた。死については既に考
え尽されていた。門司を出て以来私の運命は